

**袖廼雫 : 和歌 : 文苑**

著者	蘆月, 愁郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	6 8
ページ	3 7 - 3 8
発行年	1898-11-09
その他の言語のタイトル	袖乃雫 : 和歌 : 文苑
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5170">http://hdl.handle.net/2298/5170</a>

坐に歸りて各美酒を酌み佳菓を喫し且つは諸氏の厚意に感じ且つは今日の榮を悦ぶ既にして潮漸く干ければ遺憾ながら漕艇を止め艇は水上警察署に預けられぬ歓迎の人々亦漸く散じ日も亦漸く西天に傾けり衆皆欣然として快談豪歌興未だ盡さざるも愛を割きて皆佐賀に向ふ或は父母兄妹の恙なき顔を以て喜ぶもあるべく或は親戚朋友の宅に一夜の夢を結ふもあるべしこゝに先づ遠航の一段落はつきぬ

自序

漸 文 苑

和 歌

袖 廻 筆

蘆 月 愁 郎

山の巖のほとりの日雨いみじうふりければよめる

舟の雲も襖にかきくらしをやみもやらすふる涙かな

涙さへかわくまもなき衣手になほもつれなき五月雨の空

秋立ちしころ基紀君の祖母君うせ給ひぬと聞き待

待立き

君がぎを藤の衣をぶきてしていと身にしむ秋の初風

大方はすゝしとめつる秋風のあたにも吹くか君か袂に  
秋立と淺茅もいまたしら露の君が袖にそまつは置らむ

またほとへてわが先きの歌の師淺野輝之大人のう

君ををしむ涙は雨とふるよはにかさねの虫もねをのみそなく

益城野のうたのあらす田おれにけりかへすくも君をしを思ふ

山の端にわれて入ぬる弓張の月ふさかへせ天の河風

朝露とさえてし君か玉の緒の思ひみたれでちる涙かな

立かへりよに二たひは出こねはいとをしまるゝ山のはの月

柚人のかしく飯田の山の端に立つやけふりと消えし君はも

漢文

自序

元和偃武自徳川氏興諸侯述職于荏都二百七十年于此矣此間人士之踐東海往來  
者羣繁如織富岳也堰水也鎌倉也伊勢也若西京若浪華於神社於佛閣名區勝地文  
以叙其行跡詩以寫其景致筆而傳者蓋亦不爲尠矣是以世人詳其風士民俗猶於吾  
閩里然苟如是則此篇屬陳腐類濫吹蓋非供之蠹魚則泉之飢鼠然今日風俗與徳川  
氏之風俗背馳封建形勢與王政之形勢異觀矣况火輪船馳於水蒸氣車走於陸古人